

聴覚障害者の S-HTP についての一考察

栗村昭子 (関西福祉科学大学)

問題と目的

描画テストはパーソナリティテストとしてまた知能測定のために使用されてきた歴史がある。S-HTP は Buck の HTP とは異なり、一枚の絵の中に家と木と人を入れて自由に描いてもらうものである。はじめてこの技法を本格的に研究した三上(1995)はその利点について、別描き HTP よりも受検者に与える心理的負担が軽度で、組み合わせて描くことでより信頼性の高い評価が可能となると述べている。

ところで、聴覚障害者への心理臨床は意外にもかなり最近になって始まったところである。聴覚障害者の問題はコミュニケーションの問題ともいわれるが、健康な聴覚障害者の基礎的資料はまだそろっていないとはいえない。今回、聴覚障害者の方々に S-HTP を描いてもらう機会を得た。本研究では、視覚優位の認知的特性をもっている聴覚障害者の S-HTP における特徴を調べることを目的とする。

方法

調査参加者は 10 代後半から 40 代前半までの聴覚障害者、男性 14 名、女性 10 名である。調査期間は 2013 年 3 月より 2014 年 5 月までであった。参加者はすべてことばを獲得する以前に聴力の障害をもち、現在、自立して生活している。

教示は手話ではイメージを固定してしまう恐れがあったために文章で提示した。

結果と考察

得られた結果の一部を Table 1 に示す。

田畑(2006)の大学生被検者での調査結果と同様に、統合性や遠近感において三上(1995)のそれと比べるとかなり低い値を示しているといえる。三沢(2008)や渋川、松下(2007)などが指摘している発達停滞という問題が聴覚障害者にも生じていることが考えられるかも知れない。

しかしその一方で聴覚障害者は日常的に絵をことばの代わりとして使うことも多いことから、描画のもつ意味合いが健聴者のそれと異なることも否定できない。実際、非常に説明的な絵が多くみられた。遠近感の独特な表現などもあり、判断に迷うことが多かった。今後、さらに被検者数を増やし検討を加える必要があると考える。

Table1 分析項目の出現頻度

分析項目	出現率(%)		
	女性	男性	全体
〔全体〕			
(1)統合性			
羅列	10.0	0.0	4.2
媒介による統合	10.0	21.4	16.7
やや統合的	60.0	42.9	50.0
明らかに統合的	20.0	35.7	29.2
(2)遠近感			
なし	30.0	28.6	29.2
(バラバラ)	10.0	0.0	4.2
〈直線的《重なりなし》〉	0.0	14.3	8.3
〈直線的《重なりあり》〉	20.0	14.3	16.7
ややあり	40.0	21.4	29.2
中	20.0	21.4	20.8
大	10.0	28.6	20.8
〔人〕			
(1)簡略化			
シルエット	20.0	28.6	25
記号化	60.0	35.7	45.8
簡略化なし(普通像)	20.0	35.7	29.2

注) 本研究は H24・26 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C) 課題番号 24530898)の助成を受けたものである。